

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04094

研究課題名(和文) 社会学者の自伝とリサーチドキュメントから再構成する質的調査展開の知識社会学的研究

研究課題名(英文) A study of qualitative research development using a sociologist's autobiography and research documents research from the perspective of the sociology of knowledge

研究代表者

小林 多寿子 (Kobayashi, Tazuko)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：50198793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後日本の社会調査の系譜のなかで1950年代60年代に質的調査がいかに試行され精練されたのか、その初期形成過程を社会学者・森岡清美の具体的な調査実践のなかに展開をみることで、質的調査の成立実態を知識社会学的歴史社会学的に明らかにし、戦後期の社会調査史に新たな光を当てることをめざした。自伝及び自伝的著作物をもとにリサーチキャリアを跡づけ、リサーチドキュメントの精査によって1950年代60年代の調査実態と展開を検討し、その成果は『一橋社会科学』に「森岡清美調査資料群と戦後の社会調査の展開」としてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本の社会調査は「社会学の社会科学化」への強力な志向で数量的調査が隆盛となったことは知られているものの、1970年代以前については質的調査研究がいかに形成されたのか十分に検討されていない社会調査史の空白期であった。本研究において、宗教社会学・家族社会学を切り拓いた森岡清美の自伝と1950年代60年代のリサーチドキュメントをふまえてその調査実践の展開を明らかにしたことで、社会調査史への新たな頁を付加し、質的方法論に歴史性を付与する意義がある。

研究成果の概要(英文)： In this research the concrete research practice and research documents of sociologist Kiyomi Morioka were examined while considering the actual conditions of qualitative research from the perspective of the sociology of knowledge and historical sociology. The research question to be answered is how qualitative research was attempted and refined in the 1950s and 1960s, which aims to shed light on the history of Japan's postwar social research.

Morioka's research career was traced through his autobiography and his autobiographical works, and the actual status and development of his research in the 1950s and 1960s were examined by scrutinizing research documents. The results of this research were presented in Hitotsubashi Bulletin of Social Sciences as 'Kiyomi Morioka Research Documents and the Development of Social Research in Postwar Japan' (Vol.11 Special issue 2019)

研究分野：経験社会学

キーワード：質的調査の成立 社会学者の自伝 リサーチドキュメント リサーチキャリア 1950年代の社会調査

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景として、とくにつぎの二点をあげたい。第一には、質的調査研究の展開状況を検討する必要性であり、第二には、社会学者の自伝を知識社会学的視点から研究する可能性である。

第一に、戦後日本の社会学において 1950 年代に本格的な社会調査が始まり方法論的な確立が進み、とくに質的調査法では 1977 年の中野卓著『口述の生活史』を契機としてライフヒストリー法リバイバルといわれ、以後の方法的議論の展開はよく知られている。しかし、1950 年代から 70 年代前半までの社会調査法における質的調査のありかたについては十分な検討がなされていない現状がある。1980 年代にライフヒストリー法がアイデンティティや生活世界を理解する手法として評価され、近年ではライフストーリー論の展開やインタビュー法が実践力をつけ臨床社会学的分野を切り拓く一方で、生活史研究への回帰やオーラルヒストリーによる歴史社会学的分野への接合など多様な動向がある。このような質的調査研究系譜のなかで、1950 年代から 70 年代前半における質的調査研究の実態についてあらためて精査し、質的調査研究の系譜をおさえる必要があると考えていた。そのような時期に、1950 年代より日本の社会学の第一線で実証的研究をもとにした多くの調査研究を手がけてきた社会学者森岡清美のサーチドキュメントとの出会いによって新たな問題意識が浮上した。

第二については、社会学者個人の生涯の研究活動を包括的に考え、知識社会学的歴史社会学的観点から社会学者の自伝と社会学的研究の関係をとらえる観点を得たことにある。とくに、社会学者の人生とサーチキャリアを包括的にみる着想は次の 3 点に由来する。一つには甲田和衛による社会学者の自伝の重要性の指摘であり、二つには社会学者個人のアーカイブズの試みにあり、三つには森岡清美の調査資料群というサーチドキュメントとの出会いにある。

一つには、甲田は『社会調査』(1985)で、アメリカの社会調査の基礎を築いたラザースフェルドが社会学者の知的自伝による方法論的素養への寄与を説いた点を挙げ、自伝を媒介にした社会調査の実践理解の可能性を指摘している。社会学者の自伝は調査による知的生産の状況や思考、人間性もとらえて新たな調査論を拓く可能性のあるものとして重視した。

二つには、飯島伸子(常葉大学)、鶴見和子(京都文教大学)という社会学者個人のアーカイブズは、単に調査データの二次分析利用に留まらず、サーチキャリアやドキュメントを多面的に考察する可能性を示唆しており、アーカイブ資料の社会学的活用の視点と方法の発展が期待されている。

三つには、2011 年度来、取り組んできた社会学的サーチ・ヘリテージ研究のなかで得た機会、すなわち戦後の家族社会学・宗教社会学を牽引してきた森岡清美の調査資料群との出会いを活かす試みが本研究課題の直接的背景となっている。2012 年に森岡が刊行した自伝やその他の自伝的著作物から調査資料群を詳細に考察できるので、社会学者の人生とサーチキャリアの関係を包括的にかつ具体的に検討し、調査実践の再構成を知識社会学的に試みることで質的調査の形成の実際を解明できるのではないかという仮説を得ることができた。

本研究課題に取り組むにあたって、このような複数の観点が複合的に研究開始当初の背景にあった。

2. 研究の目的

本研究は、戦後日本の社会調査の系譜のなかでも1950年代60年代に質的調査がいかに社会的に試行され精錬されていったのか、その初期形成過程を社会学者の調査実践のなか具体的に展開をみることで、質的調査の成立実態を知識社会的歴史社会的に明らかにし、戦後期の社会調査史の書き換えをめざす。その方法としてとくに家族社会学・宗教社会学の領域で独自の質的調査研究の成果を数多く輩出してきた社会学者森岡清美の自伝とリサーチキャリアの関係に着目する。社会学者の人生と研究活動を包括的にとらえる視点を築く一方で、1950年代60年代のリサーチドキュメントをもとに調査実践を再構成して、いかに質的調査法を取り入れて家族調査・宗教調査での知的生産へ繋がったのか、自伝的著作物と現地でのリスタディで確認しながら調査展開過程をとらえ、質的調査研究の系譜における1950年代60年代の意義を複合的な研究状況のなかで解明する。

3. 研究の方法

本研究課題は、二つの主軸、すなわち一.社会学者の自伝とリサーチドキュメント研究、二.1950年代60年代の質的調査の展開研究という二つの研究を中心にして取り組まれる。さらに、二つの主軸研究は、研究過程における二つの段階でもあり、次の4種類の調査に取り組むことを計画した。

- (1) 森岡清美の自伝とリサーチキャリア調査
- (2) リサーチドキュメント調査とリスタディ調査
- (3) ライフヒストリー型人物中心のアーカイヴズ調査
- (4) 1950年代60年代の質的調査の展開過程調査

第一段階の「社会学者の自伝とリサーチドキュメント研究」として具体的に、(1)森岡清美の自伝とリサーチキャリア調査において森岡の自伝的著作物を収集し精査して70年に及ぶ研究活動を包括的に跡づけた上で、(2)リサーチドキュメント調査とリスタディ調査では1950年代60年代の調査に照準して現地再調査によって質的調査と知的生産実態を把握する。

第二段階の「1950年代60年代の質的調査の展開研究」として、(3)ライフヒストリー型人物中心のアーカイヴズ調査を国内外で実施し、ドキュメント利用の可能性を学ぶ。(4)1950年代60年代の質的調査の展開過程調査として当時の調査実践動向をとらえ、同時代の社会学者の自伝や調査テキストも含めて検討する。

このような研究方法で、戦後初期の質的調査の成立展開の実際を明らかにすることをめざす研究課題で取り組んだ。

4. 研究成果

本研究は、二つの研究を主軸に4つの調査を研究期間中に実施し、それぞれにおいて研究成果を得た。

(1) 森岡清美の自伝とリサーチキャリア調査

2012年刊行の森岡の自伝『ある社会学者の自己形成』は、歴史社会学の資料となることをめざして日記を第一次資料として手記(手紙やメモ等)、各種行政文書、新聞記事

等によって吟味して叙述する歴史研究的手法で書かれたことが特徴である。日記というパーソナルドキュメントを主軸にしつつ正確な記録を心掛けた自伝は森岡のリサーチキャリアを跡づけるのに最良の素材である。この自伝に先立つ講演集や随筆集等にも自伝的エッセイが含まれており、2003年作成の私家版『森岡清美 年譜・著作目録』も併せた複数の自伝的著作物を収集し、森岡の調査活動をその調査内容と方法で類別して整理し、時系列で森岡のリサーチキャリアを跡づける作業をおこなった。

2017年7月には森岡自身が研究協力者として一橋大学に来校され、さらに森岡宅へ2017年11月以来、2019年12月までのあいだに8回にわたり訪問してインタビューを実施した。1948年以来、取り組んできたさまざまな調査実践について資料の補足も含めて解説を受けたことをもとにして、森岡のリサーチキャリアについて詳細に跡づけた。

(2) リサーチドキュメント調査とリ-スタディ調査

リサーチドキュメントとは、調査活動で産出された資料群であり、第一次資料や調査票、調査ノート等を含む。森岡資料群は、宗教調査、家族調査、地域調査、大学関係資料(調査実習資料・機関誌等)のドキュメントから成り、段ボール約20個分になる。もっとも古い調査は1948年伊賀調査資料、1949年の三重県真宗史資料であり、1950年代60年代70年代の調査が主で、1982~84年の静岡市家族ライフコース調査がもっとも新しい。さらに、2018年10月には新たな調査資料も預かり、詳細な検討をおこなった。

これらのなかから1950年代60年代の調査実践として 真宗寺院調査(石川県・福井県) キリスト教会調査(群馬県)という2つの調査に注目し、リサーチドキュメントの精査と現地再調査によって当時の調査実態と変容を確認するリ-スタディを実施した。

石川県能登半島での真宗寺院調査は、1952年九学会連合共同研究の一環で始まり、その後、森岡が単独調査で真宗寺院研究を深めたが、当時の調査スタイルとともに、テープレコーダーのない時代のインタビュー調査という調査記録の方法や中学生の作文調査等、独自の調査法や第一次資料の活用の仕方が注目される。そこで、能登調査のリ-スタディをおこない、1950年代当時の調査地と調査対象寺院を訪問調査した。

キリスト教会調査は、1950年代の福島県伊達教会、群馬県島村教会、安中教会、1960年代の山梨県日下部教会、勝沼教会調査と続くが、そのなかでも島村教会と安中教会を再訪調査した。

(3) ライフヒストリー型人物中心のアーカイブ可能性を探索するアーカイブズ調査

環境社会学者の飯島伸子文庫(常葉大学)と京都文教大学図書館の鶴見和子文庫は、日本の社会学における人物中心型アーカイブとして先駆的な例である。いずれの社会学者も豊富な社会調査の実践歴があるので、リサーチドキュメント・アーカイブとしても着目し、実際に訪問してアーカイブ作業に携わる専門家のインタビューをおこなった。

京都大学研究資源アーカイブがおこなう研究者人物中心のアーカイブのあり方や立教大学共生社会研究センターの取り組むアーカイブもそれぞれ特徴があり、実際に現場を訪れ、専門家にインタビューをおこなった。

さらに社会調査データ資料のアーカイブズとして日本の社会学では最先端にある東京大学社会科学研究所 SSJDA も訪ね、実際の状況をインタビューした。

(4) 1950年代 60年代の質的社会調査の展開過程調査

森岡の初期調査を跡づけることで、1950年代 60年代の質的調査の展開過程を明らかにする資料文献調査を実施した。鈴木栄太郎、有賀喜左衛門、福武直、中野卓など先達や同輩の社会学者の影響を検討した。

さらに戦後の占領期 GHQ 民間情報教育局 CIE で実証研究に携わった社会学者がアメリカの社会学者らと協力して実施した農地改革調査等でアメリカの調査法導入が始まっており、彼らとの共同調査の実践も見逃せない。そこで、当時の時代状況を踏まえた 1950年代 60年代の調査活動を、戦前期の農村社会調査の批判的継承、大学教育での社会学の制度化、占領期のアメリカ社会学の影響、九学会連合共同研究や労働省調査など共同調査への参加という軸で社会学者たちとの関係性や調査方法の導入過程をとらえ、質的調査の成立展開の実際を具体的な調査に則して明らかにするための検討をおこなった。

研究期間中の以上のような調査をふまえて、研究代表者は、本研究課題に関わった二人の研究協力者(森岡清美・桜井厚)と、二人のリサーチアシスタント(徳安慧一・庄子諒)とともに、『一橋社会科学』(第 11 巻別冊)において論文を集約し、「森岡清美調査資料群と戦後の社会調査の展開」というタイトルで特集号を刊行することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 21
2. 論文標題 オスカー・ルイス 開かれたフィールドワークへ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 13
2. 論文標題 「保苺実の世界」への誘い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 5 - 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24530/jjoha.13.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 保苺桂子、保苺信男、小林多寿子	4. 巻 13
2. 論文標題 もうひとつの「保苺実の世界」 父母の語る『ラディカル・オーラル・ヒストリー』への道	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 35 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24530/jjoha.13.0_35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 巻頭言 特集 森岡清美調査資料群と戦後の社会調査の展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/30885	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 リサーチ・ヘリテージとしての森岡清美調査資料群 森岡調査資料との出会い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30884	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林多寿子	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 1950年代60年代の調査実践と研究キャリア形成 森岡清美の調査スタイル	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 129-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30878	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森岡清美	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 石川県能登・中学生の作文に描かれた真宗寺院	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 29-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30883	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桜井厚	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 フィールドワークはどのように行われたか 森岡清美の能登真宗教団研究調査の経験から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30882	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桜井厚	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 写真からみるフィールドの風景 奥能登、輪島市町野町の過去と現在	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 97-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30879	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳安慧一	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 森岡清美の調査資料からみる社会調査法の彫琢と社会調査教育 「業績にならなかった」調査資料群から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30881	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 庄子諒	4. 巻 11巻別冊
2. 論文標題 調査される側にとって森岡清美の調査経験がもたらしたもの 1950年代の浄土真宗寺院調査にかんするリ スタディから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 81-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30880	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小林多寿子
2. 発表標題 質的調査データとアーカイヴ化の問題
3. 学会等名 日本家族社会学会NFRJ質的調査研究会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林多寿子
2. 発表標題 オーラルヒストリーとアーカイブ化の可能性 2012年質的データアーカイブ化研究会調査より
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林多寿子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 嵯峨野書院	5. 総ページ数 158
3. 書名 系譜から学ぶ社会調査 20世紀の「社会へのまなざし」とリサーチ・ヘリテージ	

1. 著者名 小林多寿子・浅野智彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 304
3. 書名 自己語りの社会学 ライフストーリー・問題経験・当事者研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森岡 清美 (Morioka Kiyomi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力 者	桜井 厚 (Sakurai Atsushi)		